魔法？……面白そうだ

栂焉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法？……面白そうだ

【Ｎコード】
Ｎ７１９４Ｘ

【作者名】
栂焉

【あらすじ】
この前に出した短編の連載バージョンです。
此は二人の義理の娘を持つ科学者のお話。
そんな彼が、魔法に関わるとどうなるのか。
彼が魔法を知ったとき、彼は何をするのか？
実際いうとまだ考えていない。
とりあえず、彼の活躍に乞うご期待ください。

プロローグ（前書き）

どうも、栂焉です。
短編のほうはミスりました。
二度出しすいません。
感想をくれると阿波踊りを踊るレベルにテンションが上がります。

プロローグ

やあやあ、画面の前の暇人諸君。
俺の名前は奇慚古鏡（きざんこきょう）ただの科学者さ。

さて、いきなりだが俺には二人ほど娘がいる。
血が繋がっていないのだが、それはまあいい。
最近妹のほうの娘の中学に子供の教師と妙な教師が入ってきたらしい。
子供は教師と言えるのか？

話を戻すが、子供先生の方は教える教科を言うときに「まほ…」とか言ったらしい。
「まほ…」？どう言う意味だ？
まさか魔法じゃないだろうな？
……あり得んな。
木ノ芽（厨二病）では無いであろうし。
数えで十らしいので、その年で厨二病は可哀想過ぎる。
そしてその子供先生だが、クラスにはいるときにクラスメイトが仕掛けた黒板消しが当たる直前に何故か黒板消しが一瞬空中で停止したらしい。
手品だろうか？興味深いな。
どうでもイイが

そして、もう片方の教師だが。
銀髪オッドアイらしい。
どこの小説だ？テンプレか？
最近でもそのような設定の小説は希少価値があるぞ。

まあいい、そしてその銀髪だが、結構な美形らしい。
まぁ、娘のお眼鏡にはかなわなかったらしいが。どうでもいい。
そしてその銀髪が何故か娘を見て、「…あんな奴はいなかったはずだ」とか小声で行ってそのあと「そうか！俺と言う転生者が入った事によるイレギュラーか！」などと小声で叫ぶと言う奇妙な事をしていたらしい。
正直、キモかったらしい。

ふむ……
転生…確か生まれ変わりや再有とか言う呼び名もあったな。
転生者と言う事は転生を行ったと言う事か？
転生を行ったと言う事は簡単にいえば、一度死んだと言う事。
死か、流石に完全に死んだ事は俺も無いな。臨死なら何度かあるが。
転生者は二人目だな。
片方は自称だが。

まぁ、娘達にはそれらにあまり必要以上に近寄らないよう言っておけばいいか。
向こうから必要以上に近寄って来たら、形を使わなければ殴ったりしてもいいと許可を出しておこう。
アレは創った本人が言うのもなんだが、常人に当てたら普通に１８禁なレベルになるからな。

それにしても、子供先生に銀髪オッドアイ、其れにあのクラスか…
元々異常であったのに、更に異常になったな。
精々楽しめればイイが。

ま、期待はしてないがな。

蒼も朝寝坊をする…やめておこう（前書き）

原作メンバー登場！
とは言っても、ほんのチョイ役ですが。
因みに魔法は微塵も出て来ません。
これが当分続くでしょう。

蒼も朝寝坊をする…やめておこう

我が娘、奇慚紅(きざんあか)は、どれかと言うと不良に属するのであろう。

何処で教育を間違えたのかはわからない。
なんせ、当時１０歳の少年に生まれたばかりの赤子を立派に育てろなんて、無理難題だろう？
人生経験もロクに無い少年にちゃんとした情操教育を赤子に施せ、と言われて普通はできるだろうか？

まぁ、そんな過去(どうでもいい事)は置いといて。
我が娘、紅は学校では言葉使いが悪いらしい。
家や心を許した友人の前では素に戻るのだが、学校では酷いらしい。
灯璃(とうり)嬢が言っていたので間違いでは無いだろう。

まぁ、別に言葉使いを直せと説教するつもりもないのだが、教師陣にもその態度だと、莢(さや)なら問題無いだろうが他は駄目だろう。
下手をすると、内申が幾分が下がる。

莢と言うのは、望読莢(もちよみさや)と言う俺の後輩の一人である。
一言で言えば莢は苦労人だ。
まぁ、実際はそうでもないのだが、何となくそんな感じがするのだ。
簡単に言えば、幸薄そう。

まあ莢の事は置いておいて。
もう一人の娘、奇慚蒼(あお)の事は父親である俺でもよく解らない。
別に変な能力を持っているわけでも無いが、喋り方が何処か見下すような感じらしい。
まぁ、例によって家や心を許した友人の前ではそんな事はないのだが。

『〜♪〜♪』
ん？電話……蒼からか、珍しいな。

「どうした？」
『あ、もしもし？父さん？』
「ああ、何のようだ？こんな真昼間に」
『うん、ごめんね？ちょっと父さんに頼みたい事があるんだけど……いいかい？』
「何だ？言ってみろ」
『うん、今日弁当を家に忘れちゃったんだ。だから、持って来てくれないかい？』
「ああ、いいぞ。三十分後位でいいか？」
『イヤイヤ、それじゃあ遅過ぎるでしょ。今から持って来てくれると嬉しいなあ』
「わかった。じゃあ、今からいくからな？」
『うん。宜しく頼むよ』

ふう、行くか。

side　蒼

「ねえねえ、奇慚さん。
誰に電話かけてたの？」
「ん？ああ、父さんさ」
「お父さん？どうして？」
「いやね、今日は偶々寝坊してしまって弁当を家に忘れてしまったんだよ」
「へえ、珍しいね。奇慚さんが寝坊なんて」
「イヤイヤ、何言っているんだよ、僕だって人間だ。
そうゆう事ぐらいザラにあるさ」
「あ、そういえば奇慚さんって「おーい！アスナー！」…ごめんね奇慚さん。木乃香が呼んでるから行ってくるね？」
「ああ、じゃあまた後で。
神楽坂君」

ふう、やっと行ったか。
相変わらず彼女は相手をするのが面倒だ。
彼女は馬鹿だが、その分嫌なところで勘がいい。
だから、本心を悟らせないようにするのが面倒だ。
まったく、僕の本心を知っていいのは姉さんと父さんだけだ。
秋水は…微妙と言ったところかな？

まぁ、これ以上書くのが面倒なので、父さんの如く勝手に自己完結しておこう。
ん？メタ発言だって？何の事だい？

『ガラガラッ』
「あー、蒼はいるか？」

あ、父さんが来た。

「あの…どちら様でしょうか？」
「ん？ああ、此は失礼……でも無いな、俺は奇慚古鏡、奇慚蒼の父親だ異論は認めん」
「は…はあ。それで、その奇慚さんの御父様が何のようです「お父さん！」……か？」
「ああ、蒼。ほれ、コレだろ？」
「うん。ありがとうございます。」
「うむ、じゃあ俺は帰る。
なんせ、無断で入った故にガードマンやらが襲って来たからな。早めに帰ったほうがいいだろう」
「うん、じゃあまた家で」
「ああ、じゃあな」

うん、弁当も来た事だし早速食べるとするか。

「あの、奇慚さん？少しいいでしょうか？」
「ん？何だい？雪広くん」
「あの方は一体？」

「だから、僕のお父さんだって。さっきも言っただろう？」
「それにしては随分とお若いようですが…」
「あ、それは私も思った！」
む、朝倉君もか…面倒だな。
「まぁ、当たり前だろう。
だって父さんはまだ２６歳だからね」
『え？』
『な、なんだってーー！？』
「？何故そんなに驚くんだい？」
別にそんなに驚くほどじゃないと思うけど。
「え…えっと。奇懺さんの御父様は２６歳なのですか？」
「うん、そうだけど？」
「奇懺さんは１４歳でしたよね？」
「うん」
「と言う事は……」
『１２歳のときに奇懺さんを産んだって事！？』
「いや、違うよ。僕とお父さんは、血が繋がっていないんだ。
拾われっこだからね」
「ご…ごめんなさい…」
「いやいや、別に気にしてないよ。どうでもいいし、それに…父さんな拾われてよかったと思うしね」
「そう…」
「さて！秋水、お昼を食べに行こうか」
「ほーい。じゃあ行こうか」

まぁ、その後授業も終わり、家に帰った。
その描写は伝えるのが面倒だから、キンクリさせてもらうよ。

「ただいまー！」
「おお、御帰り。今日はどうだった？」
「うん。今日はね…」

これが僕の日常。
変えられるモノなら変えてみろ、その時は僕が全力で叩き潰してやる。

それでは皆様、さようなら。

木ノ芽からの依頼…断固拒否（前書き）

皐月二八様、感想ありがとうございました。

木ノ芽からの依頼…断固拒否

『Ｍｏｏｎ　Ｄｒｏｐ』と言う喫茶店が在る。
其処は、先締木ノ芽（さきじめこのめ）と言う中二病な後輩が経営する喫茶店だ。
今回は其処から始めさせて貰おう。

「やあ、久しぶりだね。
ようこそ。私の喫茶店（神殿）へ。
歓迎するよ、古鏡先輩」
「ああ、久しぶりだな。木ノ芽。喫茶店（神殿）については、スルーさせて貰うが異論は無いな？」
「ああ、相変わらず古鏡先輩は冷たいね。」
「これが普通の反応だ。
寧ろ来ただけ有難いと思え。
この、厨二病」
「…あぁ、流石は古鏡先輩だ。
そんな言葉攻めだけで私をこんなにも感じさせるとは。思わず絶頂してしまいそうになってしまったよ」
「黙れ、死ね、くたばれ。
この性倒錯の変質者め」
「あぁ、そんなつれなくて、素っ気なくて、冷淡で、冷酷で、澆薄な古鏡先輩も素敵だよ」
「……」
「あぁ、そんな目で見ないでくれよ。流石に古鏡先輩にそんな目で見られるのは悲しいよ」
「お前は何だ？どれだけポジティブなんだ？」
「いいや、それは違うぞ古鏡先輩。
私はただ、被虐至高（マゾヒスティックハート）と言う能力を持っているだけなのだよ。

尤も、発動するのは古鏡先輩だけだけどね」
「そんな特別はいらんし、それはお前がただ単に、ドMなだけだろう」
「あはは、つれないな。
…古鏡先輩？女性がこんなにも誘っているのだから、次にヤる事は分かるだろう？」
少し潤んだ目で、上目遣いで見てくる。
俺はそれにこう答える。
「ああ、分かるぞ」
「では！「不思議物質でお前を矯正してやろう」……遠慮しておきます」
「残念だ」

ああ、疲れる。
こいつは色々と最悪だ。
頭はイイが、中身が駄目だ。

「それで？一体なんの用だ？」
「ああ、そろそろ本題に入ろうか。
……古鏡先輩、依頼だ」
「依頼か。何時ぶりだ？
そっちは」
「確か……四年ぶり位だね」
「まぁ、それはどうでもいい。
依頼内容は何だ？」
「ああ、簡単に言えば情報を集めるのを手伝って欲しい」
「情報？何故だ？
情報（ソレ）はお前の得意分野だろう？」

「まあ確かにそうだけど。
流石に未知の世界に単身、しかも何のコネもないのに、やるほど馬鹿では無いよ。」
「未知の世界だと？」
「ああ、その世界には地球と似た様な文化だが、何かがまったくもって違うらしい」
「その何かとは何だ？」
「さあ？それは私にもまだ解らないよ。で、請けてくれるかい？」
「断る、拒否する、面倒だ、帰れ、死ね」
「ひ…酷いな、其処まで言わなくてもいいんじゃないか？」
「何を言おうともお前の依頼は絶対に請けない」
「ぶう、分かったよ。
じゃあせめて、微風（そよかぜ）を呼んでおいてくれ」
「わかった。
じゃあ俺は帰る。またな」
「ああ、またね」

ふむ、未知の世界か…
不思議物質を使えばどうとでもなるだろうが、まぁいいか。
画面の前の暇人諸君もそう思うだろう？
地球と似た様な文化らしいから、前人未到では無いだろうが、どうでもいい。
関わらなければいけないと言うわけでも無いからな。

『プルルルル』
『はい、微風っすが。
どうしたんですか？古鏡先輩？』
「あぁ、微風。いやなに、木ノ芽に呼んでおいてくれと頼まれたか

らな」
『げ、木ノ芽っすか。
で、あのドMが私に何の用っすか？』
「依頼だそうだ。俺も頼まれたが、拒否したからお前に行った」
『うう、なんで拒否したっすか？』
「未知の世界なんぞに俺は興味が今は無いからな」
『未知の世界？』
「ああ、木ノ芽曰く、『地球と似た様な文化だが、何かがまったくもって違う』らしい」
『ふむ、興味深いっすね。
……分かったっす。その依頼請けるっす』
「ああ、了解した。
木ノ芽には自分で連絡しておいてくれ」

今日はこれ位で終わりだな。
その後別に面白い事があったと言うわけでもないのでキンクリさせてもらう。異論は認めん。
では、さらばだ。

む、そういえば。
喫茶店に行ったのに、茶の一つも飲んで無いな…
まあ、それは今度でいいか。

紅視点…蒼の愚痴は長かった（前書き）

何気に早くかけたので投稿。

紅視点…蒼の愚痴は長かった

やあ、画面の前の暇人諸君。
毎度お馴染み、奇慚古鏡だ。
今日は上の方の娘の話をしよう。
とは言っても、視点が俺では無く、紅の視点になるだけなのだが。
それでは、始めよう。

ｓｉｄｅ紅

「あー、ダリィ。担任クタバレ」
「ちょっ、紅ちゃん！
私たち初登場なんだから、いきなりそんな事言っちゃダメだよ！」
「甘いな灯璃。
実際俺達は、第一話時点で名前だけは出ているんだよ」
「第一話とか言っちゃいけません！」
「だったらお前の初登場も駄目だろう」
「初登場ぐらいなら大丈夫だと思うよ」
「なら、第一話も平気だろう」
「うーん、そうじゃないんだけどな…」

じゃあ何なんだよ。
よう、画面の前の暇人共。
俺の名前は奇慚紅。ただの学生だ。
ん？これはさっき親父がやってたな…
まあいいや。

「ってか、俺等の初台詞がこれでいいのかよ」
「いいんじゃない？
たぶん古鏡さんも、『大いに結構、好きにやるとイイ』って言うと思うよ？」
「まあ、親父ならそう言うだろうな」
「まあ、この話は終わりにしようよ。何かこっから先は、色々と危険な気がするからさ」
「ふぅん、そうか？まあいいや」

実際言うと俺も何か危ない気がする。

「そういえば。蒼ちゃんは新しい担任の先生はどうだって言ってた？」
「ん？ああ、餓鬼の方は全てに於いてウザくて、銀髪の方は色々とキモいらしいぞ？」
「あ、あはは。随分とハッキリ言うね…
でも子供先生は、まだ数えで十歳なんでしょ？」
「数えで十だからとはいえ、英国紳士を自称しておきながらクシャミで服を脱がすようなのを俺は先公とは呼ばねえ」
「クシャミで服を脱がす…
何だか不思議物質に似てるね」
「ざけんな。そんなのと、親父のモノを一緒にすんじゃねえ」
「うん…ごめんね。今のは流石に自分でもないと思ったよ」
「ったく、謝る位なら最初から言ってんじゃねえ」
「でも銀髪先生の事はどうして、
色々とキモいって判断に至ったの？」
「ああ、一つ一つ言ってくのはめんどいから一気に言うぞ？」
「……そんなにあるの？」
「ああ、そうだ言ってくぞ？
…目線がいやらしい、言動がキモい、銀髪オッドアイってのがキモ

い、偉そう、無駄に干渉してくる、狙い過ぎ、木ノ芽さん程では無いが中途半端に厨二病が混じっててキモい、自分と秋水を見る目が監視しているような感じでウザい、頭が悪い、木ノ芽さん情報で低学歴、木ノ芽さん情報で教員免許なんて持ってない、存在が不自然、しかしそれに誰も気づかないのにイラつく、なんか秋水が悩んでる、自称最強チート転生者、最強を父さんに断り無く自称しているのに殺意が湧く、自分は選ばれた者だ的な考えがキモい、無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）？何その厨二病擬きの名前、無駄にボディータッチしてきてキモい、ハーレムとか考えてそうでキモい、ってか小声で実際言ってる、仕事しろよ、莢さんがマジ泣きしてて可哀想、とにかくウザい、物凄くキモい、とっとと死ね、さっさとクタバレ、こっちみんな、こっちくんな、臭いんだよ、近寄るな、触れるな、僕に話し掛けるな、喋るな、会話するな、呼吸すんな大気が汚れる、本心タダ漏れなんだよ、半径９０００億ｋｍ以内から消え去れ、太陽に焼かれて燃え尽きて死ね、職に欠いて病に罹って飢餓と病に苦しんで死ね、寧ろ僕が不触使って殺したい。

…まだまだ有るが、これ以上は言わないでおこう。」

「まだあるの…？なんか地球外に出ていけって言ってるようなのも有ったような気がするけど」

「ああ、蒼にしては珍しく、愚痴が一時間以上続いたんだ。

親父が全部付き合ってた。

因みに半径９０００億ｋｍは、太陽系をたぶん十回以上は余裕で飛び出しているぞ」

「一時間以上…凄いね。

蒼ちゃんを其処までムカつかせるって。付き合う古鏡さんも凄いけど」

「ああ、蒼曰く、『木ノ芽さんよりも疲れる』らしい」

「それも凄いね…

私も何か色々と私も調べておこうか？」

「いや、やめとけ。

お前が穢れるし、脳細胞の無駄だ、寧ろ、脳細胞が癌細胞になるレベルの無駄だ」
「いや…それは無いでしょ。
ましてや癌細胞にはならないだろうし…
それにしても、古鏡さんはまだ何も行動を起こしてないの？」
「ああ、一応様子見をしておくんだそうだ」
「珍しいね、古鏡さんがこんな時にうごかないなんて。
何時もなら、不思議物質で速攻で解決するのに」
「ああ、実際面倒なんだそうだ。
蒼も自分で解決するから、お父さんは関与しなくていいって言ってたからな」
「へえ、珍しいね、蒼ちゃんがお父さんを頼らないなんて」
「実際俺は、明日っつか今日天変地異が起こるんじゃねえかと、気が気でなかったんだ」

実際にあの蒼（ファザコン）が親父を頼らないなんて、今までに二度有ったか無かったか迷う位だ。
ファザコンの事に関しては、俺もとやかく言えないんだがな。

「おい…奇慚、種花、授業中だぞ、しずかに「うるせェてめえは黙ってろ」
「ほら、紅ちゃん。
そんな事言っちゃダメだよ？
今のは授業中に話し込んでた私達が悪いんだから」
「チッ…
……きぶんがわるいのでほけんしつにいってきまーす（棒）」
「えっあっちょっ！？紅ちゃん！？『ガラガラッ』もう…」

チッ、つまんねえ。
まあいい、こっから先はキンクリだ。

異論は認めねえ。
じゃあな。

蒼視点…色々と混ざってきた（前書き）

今回初出のアホ猫さん。
解る人には分かるでしょう。
実際は猫なんぞではなく、古鏡が名前が何か鳴き声に似てるからと言う理由でつけたあだ名です。

蒼視点…色々と混ざってきた

やあ、画面の前の暇人諸君。
奇慚古鏡だ。
……嘘だ、奇慚蒼だ。
ん？何故お父さんじゃ無くて、僕かって？
今日父さんは、ちょっと仕事で出かけているんだ。
確か…『なんとかの森』とか言う場所で待ち合わせているんだってさ。
何か前に炎の塊みたいなのに燃やされちゃって、燃え尽きちゃった場所らしいけど、まあ例の如く、不思議物質で一発解決だったそうだよ。

今は居住者の……アホ猫さんって人がその場所を隔離しているんだって。
まあ、それでもお父さんが行けるのは、不思議物質の力で説明が…つかないね。
だってあれ、不思議すぎるんだもん。

アホ猫は本名じゃ無いだろうけど、何度聞いても教えてくれないんだ。
何時も、『もうちょっと精神が丈夫になったらな』って言って流されるんだ。
会ってみたいけど、何か危険な気がする。
主にＳＡＮ値が、ガリガリ削られてくるような予感がする。
まさに、ＳＡＮ値直葬だね！
…ゴメン、今のは流石に自分でもないと思ったよ。

って言うか、ＳＡＮ値って何？

まあでも、今回は遅くなるらしいから。
三日位掛かるらしい。
何か、アホ猫さんと一緒に、いろんな所を廻って、アホ猫さんの知り合いの、蜥蜴さんと蛸さんを起しに往くらしいよ。
実際にはもう一人いるらしいけど、その一人はもうすでに起してあって、今は木ノ芽さんの店に預けてるらしい。
よりにもよって木ノ芽さんの所か…
可哀想に、名も知らぬ人と、寝てたのにアホ猫さんとお父さんに無理矢理起こされる蜥蜴さんと蛸さん。

んー、蛸に蜥蜴…何か何処かできいた若しくは見た事あるような気もするけど、よくわかん無いや。
まあ、たぶん気のせいだろう。

さて、今日はお父さんが居ないので、徹頭徹尾僕の視点でやらせて貰うよ。

ｓｉｄｅ　蒼

ん？ｓｉｄｅ表示はいらないんじゃ無いかって？
一応だよ、一応。

さて、今日はお父さんが居ないため僕の視点でやる事になったんだけど、何をすればいいんだろうか？

「そんな訳でエヴァ君。
どうすればイイと思う？」
「どう言う訳だ。
それに、何時も私に話しかけるとき位は、その巫山戯た自己完結を止めろと言っているだろう。」
「あー、何かやっぱりその喋り方、雛子さんに似ている気がするよ」
「話を聞け！無視をするな！」
「あー、はいはい。
静かにしようね、エヴァ君。
今はまだ誰も教室に居ないからよかったけれど、誰かが居たらすっごい驚かれると思うよ」
「だから話を聞けぇ！」
「はいはい。静かにしようね？おばあちゃん？」
「ええい！おばあちゃん言うな！私は永遠の十歳だ！」
「それ自分で言ってて悲しくならない？
しかも十歳って（笑」
「うう、もうそれ以上言わないでくれ。
真面目に心が粉砕する…」
「『真面目に心が粉砕する…』……（笑」
「うわあああああああん！蒼なんて大っ嫌いだぁー！」
「ああ、マスター、お待ちください……泣いているマスターも可愛らしい（ボソッ」

…今茶々丸君が言った事は無視しておこう。
主に彼女とエヴァ君の名誉とかの為に。

「ヒャッホォウ！一番乗りだ…って、なんだよ蒼。
もう居たのかよ、一番乗りだと思ったのに」
「ああ、御早う秋水。
ついでに言うと、秋水は一番どころか、二番でも三番でも四番でも無く、五番目だよ
残念（笑」

因みに一番はさよくん、二番は僕、三番四番はさっき出てったエヴァ君と茶々丸君。
まあ尤も、さよくんはずっと教室に残っているようだけどね。
そう言う意味なら僕が一番かな。

「ちぇっ、つまぁんなぁいのぉ」
「何？その変な喋り方？」
「最近のマイブームだ！」
「やめときな、それにすっごくイラっとくるから」
「（；。д。）」
「顔文字も。
普通の人には分からないから。」
「イイじゃん。別に蒼は
解るんだから。」
「そう言う言語は、バカレッドが最終形態に成ったときしか解る人は居ないよ」
「おお！最終形態！
どんな感じになるんだアスナは！」
「『バカレッド』神楽坂明日菜⇒『ゴッドオブＢＡＫＡ』神楽坂明日菜

攻撃力２５００⇒１２７０００
防御力１２００⇒－９９９９９
バカ族・効果
このモンスター(馬鹿)がいる限り、クラスメイトの成績は上がらずに毎ターン十点ずつ下がっていく。
」
「（；゜０゜）」
「だから其れはやめなって。
まあ、分からないでも無いけど」
「最悪じゃん！何その最終形態！
『クラスメイトの成績は上がらずに毎ターン十点ずつ下がっていく』
ってなんだよ！ほんっとに最悪じゃんか！」
「当たり前だよ、だってあのバカレッドだよ？
最終形態がそんな感じになる事位は容易に想像できる事だよ」
「憐れアスナ。私はお前を切り捨てる。それは四捨五入の如く」
「確かに神楽坂君は四捨五入で言えば、０か１だろうね」

こんなくだらない話も偶にはいいモノだ。
まあ、このクラスで出来るのは秋水とエヴァ君と茶々丸君だけだろうけど。
これから話はエンドレスに続いたのでキンクリだ。

さて、今は英語の授業。
悪く言えば、子供先生の授業だ。

「はい、じゃあ真桜さん。
この、『私は冬に散る不思議な桜を見ました』を訳してください」

「えーと…確か…
Ｉｃｈ　ｓａｈ　ｅｉｎ　ｓｅｌｔｓａｍｅｓ　Ｋｉｒｓｃｈｂｌ？ｔｅｎ　ｆａｌｌｅｎ　ｉｎ　ｄｅｎ　Ｗｉｎｔｅｒ
だったような気がする！」
「えっと…其れはたぶん英語じゃ無くて、ドイツ語だと思います。
英語の授業ですから、ドイツ語じゃ無くて、英語でお願いします」
「Ｉ　ｓａｗ　ａ　ｓｔｒａｎｇｅ　ｃｈｅｒｒｙｂｌｏｓｓｏｍｓ　ｆａｌｌ　ｔｏ　ｗｉｎｔｅｒ」
「はい、正解です。
じゃあ次は…」

まあ、何故かイラつくから何時もの如くキンクリだ。
と言うか、秋水よ。
何故ドイツ語を話せる。
…そういえばお父さんが教えてたな。

さてさて、時は流れて休み時間。
場所は教室。
エヴァ君も機嫌を直して帰ってきた所だ。

「あ、御帰り。おばあちゃん」
「おばあちゃん言うな！」
「はいはい。　で？珍しいね、エヴァ君が戻ってくるなんて」
「いいだろう別に、私がどう行動したとしてもお前に指図される謂れは無い」
「いや、そう言う訳じゃ無くて…」

「ん？この後何かあるのか？」
「……次の時間、―ジークフリート・R・グローラス《厨二病野郎》の授業」
「なん…だと…
其れは本当なのか！？蒼！？」
「ああ、残念ながら」
「クッ、早く逃げなければ。
アレは異常にキモすぎる！」
「残念。もうチャイム十秒前だよ」
「だ、大丈夫だ！今から出れば逃げ切れるはず！」
「いや…そんな自分に言い聞かせるように叫んでも…
あ、来た」
「『ガラガラッ』おーす、授業始める…ぞ…
おお！エヴァ！ついに俺の授業に参加してくれる気になったのか！」
「クッ、黙れ！貴様程度にそう呼ぶ許可を出した覚えは一切無い！」
「あっはっは、つれないなあ。
もっと甘えていいんだぜ？」
「キモい！キモすぎる！」
「ツンデレもいいが、俺はもっとデレて欲しいぜ？」
「……秋水。
奥義許可」
「よっしゃぁ！いくぜ！
暁燈魄華（ぎょうとうはくか）！」

もう言う事は無いよね？
キングクリムゾン（迫真！

さてさて、またまた時は流れて、放課後。

あの後、エヴァ君は秋水の曉燈魄華をくらった銀髪(生ゴミ)から逃げるように去って行った。

「ただいまー！
姉さんはいるかい？」
「ん？おお、蒼。御帰り。
どうした？」
「うん、ちょっと今日はお父さんの友達に会いにいくんだ」
「へえ、何て人なんだ？」
「確か…ラインハルトさんって人と、エレオノールさん、シュライバーさん、マキナさんって人らしいよ？
しかもどこかの軍の人らしいし」
「へえ、なんか相変わらず父さんの交友関係は謎だな」
「うん、まあお父さんだしね」
「父さんだからな」
「じゃあまあ、行って来るよ。」
「何で行くんだ？」
「不思議物質。
なんか僕らは不思議物質でしか行けないらしいよ？」
「そりゃまたなんとも面倒な」
「まあ、仕方がないんじゃ無い？お父さんの友達だし」
「ま、そうか。じゃあ言って来い」
「いって来まーす」
「行ってらっしゃい」

さて、これ以上は秘密だから、さようならだ。
じゃあね。

真桜秋水のお話…一応閑話（前書き）

今回は、奇慚家の方々は名前しか出ません。

真桜秋水のお話…一応閑話

私、真桜秋水は転生者だ。
これは古鏡さんに以外に誰も知らない事。
…最近入ってきた銀髪は疑っているみたいだけど。
最初は奇慚蒼のことも転生者じゃないのかと疑っていた位だ。
今では親友だが、そんな人を疑う位に周りを警戒していたと言うことだ。

私がもらった特典は、『異常な身体能力』『武術の才能』『任意の不老不死』『絶対防御』『大気を操る程度の能力』の五つだ。

私が蒼と出会ったのは、まだ私が、原作を自分が思う通りに変えてやろうと言う無駄なことを考えていた頃だった。

蒼と出会って、少し立った頃。
蒼が強いと聞いて、勝負を挑んだことが何度もあった。
しかし、私が勝てたのは蒼が全力で手加減していた時だけだった。
其れ以外は、『異常な身体能力』を持つはずの私の身体を、余裕に超えるスピードと膂力を持って叩き潰し、『任意の不老不死』これは通常状態では、物凄い再生能力を誇るはずなのに、形に対しては多少の再生はしたが、戦技に入ってからは、ダメージを受けても回復しなくなった、多分戦技から先には再生無効の効果でもあるのだろう、『絶対防御』は形でも無いただの無茶苦茶な拳や脚でそんなモノなど元々無いかのように砕いて私自身を攻撃された、『大気を操る程度の能力』は蒼に当たる前に大気が散らされて最早あるだけ

無駄と言う状態になった。

結論、奇慚蒼はバケモノだ。

しかし、その認識は間違っていると知ったのは、蒼の父親、奇慚古鏡さんと蒼の姉、奇慚紅さんにに会ってからだった。

紅さんは私の貰った『武術の才能』なんかとは、天と地…いや、塵と太陽ぐらいの差が有るだろう。
当時は秒間に最高２７００発の拳打を放ち、最高１２５０発の蹴りを放つ。
現在はもっと増えているだろうが。
『異常な身体能力』は、足元に及ぶどころか、踵すら見えないだろう、
『任意の不老不死』などに意味は無く、ただの拳や脚で当たった所が霧状になって吹き飛ぶ。
極々稀に無量大数分の一ぐらいの確率で攻撃を当てたとしても逆に、こちらがダメージをうけるレベルだ。

古鏡さんに至っては。
ひょろい学者の様な風貌とは裏腹に、全てと比べる事がおこがましく無礼な事だった。
戦闘が始まってすぐ、私が感知できない様な速さで終わるのは当たり前。
『任意の不老不死』などあってない様なモノで、全力で手加減した、ただのデコピンで身体の八割が本当の意味で消えて無くなり再生が

四十八時間かかって三割回復できた程度だ。
寧ろ、死ねないだけ苦しかった。
その後、不思議物質で回復して貰ったが。

結論、奇慚紅さんは論外であり、奇慚古鏡さんは理解不能だった。

一応、神様曰く、無敵になれる程度の力は有るって言ってたけど、
奇慚家には手も足も出ず、動く事すら許されない。
とんだ詐欺だ。騙された。
せめて蒼といい勝負くらいにしてくれと頼めばよかった。
まあ、転生前は奇慚家の存在など事知らなかったのだけれど。

紅さん曰く、「親父の後輩…しかも非戦闘員にもすら手も足も出ない。親父の友達は会った事がねぇからよく解らねぇが、冬吾といい勝負」らしい。
冬吾とは、戦部……紅さんの創った部活で、戦闘を想定して、戦う為に鍛える部活らしい、その中でも冬吾は一番弱いらしい。
正式名称は総合戦闘学鍛錬部。

何とあの、望読先生も古鏡さんの後輩らしい。
あの気弱で軟弱そうな望読先生がだ。

不思議物質についてはなにも教えて貰っていない。教えるつもりも無いらしい。
本人達も良く解ってないらしい。

関係無いが実際の所、私はらしいを使いすぎだと思う。
それもこれも蒼の所為だ。
蒼が何でも秘密にしてなにも教えてくれないからだ。

折角だから、私視点から見た、奇慚家のステータスを紹介しようと思う。あってるとは思えないが、そこはあくまで私が見た中で最も強かった時だから勘弁して欲しい。

奇慚　古鏡

攻撃　測定不能
防御　測定不能
スピード　測定不能
知力　測定不能

奇慚　紅

攻撃ＥＸ
防御　ＥＸ
スピード　ＥＸ
知力　ＥＸ

奇慚　蒼

攻撃　Ｓ
防御　Ｓ

スピード　S
知力　EX
等と言う全員が全員、狂性能だ。
うん、勝てるわけがない。
二度目だが、奇慚家の住人は全員が全員異常だ。
これは決して趣味嗜好では無く、全てにおいての強さだ。
まあ、古鏡さんの場合は、最初から最後迄測定不能だったけど。

まあ、それはおいといて。
最近入ってきた銀髪は絶対に転生者だと思う。
何故なら、私は大気を操る程度の能力を使ってこの学園の全域を監視している。
そこで、銀髪がこの学園への侵入者退治をやっている所を見つけたからだ。
何故それだけで転生者だと解ったかって言うと、この世界…『魔法先生ネギま！』には無い筈の能力を使用していたからだ。
私の大気を操る程度の能力もそうだが、アレはあり得ない。
私の予想だが、アレの能力は多分、『めだかボックスの登場人物の能力』か『何かしらの異常と過負荷を創る能力』とかだと思う。
だって、『大嘘憑き（オールフィクション）』とか『致死武器（スカーデッド）』とか『荒廃した腐花（ラフラフレシア）』とか使ってたもん。
御丁寧にスキル名も叫びながら。
場合によっては相性最悪だし、実際勝てるかどうか解らない。
酸素を過剰投与する『破滅進化（デスマーチ）』や、極高真空空間を無理やり作って部分的に永続展開する『圧空欠壊（ノンプレス）』を使えばいけるかもしれないけれど、『死延足（デッドロック）』を持っていたなら、倒せるだろうけど殺せはしないだろう。
奇慚家の人達、特に紅さんと古鏡さんなら、１京２８５８兆０５１９億６７６３万３８６５個のスキル？なにそれ？どこの塵？その程

度の数で俺達の足元に及ぼうとしたのか？的な感じで終わるだろう。
しかも一瞬で。相手に死んだ瞬間を、感じさせる事無く、それはもうアッサリと。

まあ、それもいいとして。
最近の私の目標だが、先ずは蒼に、二発以上攻撃を当てる事だ。
それの為に毎日修行をしている。
大気の重さを自分にかかる所だけ、１０倍にしたり、武術の形を練習したりしている。
曉燈魄華も鍛練の賜物の一つだ。
曉燈魄華は一撃に必殺の力を込めて殴ったり蹴ったりする技だ。…
技とは言えないかもしれないが。

私は学校では明るいキャラだ。
まあ、実際それが、素なのだが。
蒼にはよく、子供と言われる。
それは自覚しているが、実際に言われるとなんか虚しい。
これでも、悪戯ばっかりする双子よりは大人だと思っている。てか、あの二人に負けたら、一生負け組になる様な気がする。

話は変わるが。
私は蒼の事が全く持ってよく解らない。
いつもは『守護心域（ガードソウル）』って言う、先締木ノ芽さんって人が名付けたスキルで、本心を隠してるんだって。
本人曰く、当然嘘らしいが。
どちらかと言えば、先締さんの方が、能力を持っているらしい。
能力の内容は、簡単に言えば、何処にでも行けるだけの能力らしい。

充分にすごいと思うが…

まあ、そんな感じで、奇慚家の周りは変な人が沢山いるらしい。
それは蒼が自分で知っていた事だ。
厨二病にドSに子分に二重人格に雑魚に似非関西に無言に軍人に天才に戯言遣いに殺人鬼に人類最強に悪平等に英霊に王様に意思の集合体に星の意思に真祖に吸血鬼に霊に悪魔に人形に妖怪に貴族に人造人間に獣人に魔法少女に馬鹿に狂人に魔王に宝石爺に魔法遣いに果ては神までいるらしい。

『奇慚家の…と言うよりは、お父さんの周りは本当に時系列と世界間の境界が狂っている』、と言うのが家族内（蒼と紅さんだけだが）の共通認識らしい。
古鏡さんって本当に何者なんだろうか？
知れば知るほど元々無限だったそこが、更に深くなって行く気がする。
寧ろ、古鏡さんが転生者何じゃ無いだろうか。
いや、無いだろうけど。

結論、奇慚家の人達の事はよく解らない。
あれ？なんで奇慚家の紹介になってたんだろう？
最初は私の話だったのに。
まあ、いいや。

人物紹介…という名の時間稼ぎ（前書き）

よく言えば人物紹介。悪く言えば時間稼ぎ。
実際銀髪は書いてないと言うか、考えてません。
明日ほどに次話を投稿します。

人物紹介…という名の時間稼ぎ

奇慚　古鏡
きざん　こきょう
父　主人公　２６歳　科学者　適当
一人称　俺
誕生日　６月２７日
特技　演算と解析
戦法　奇慚流砕身術
容姿　髪は白で目が隠れて肩まで伸びている　目は紅色　鼻にかける眼鏡を着けている（伊達眼鏡）
「相変わらず、不思議物質の不思議さは尋常じゃないな」

奇慚　紅
きざん　あか
娘　１６歳　学生　戦部部長　俺っ娘
一人称　俺
誕生日　６月２８日（拾われた日）
特技　手を使う事
戦法　奇慚流砕身術
容姿　髪は紅で目も紅色
「何か文句あんのかよ？
それとも、俺に喧嘩売ってんのか？」

奇慚　蒼
きざん　あお
娘　１４歳　学生　戦部部員　大人

一人称　僕
誕生日　６月２９日（拾われた日）
特技　楽器演奏
戦法　奇慚流砕身術
容姿　髪も目も蒼色
「ふう、僕の演奏はどうだった？父さん？」

種花　灯璃
くさか　とうり
友人（娘）　１６歳　学生　戦部マネージャー　内気
一人称　私
誕生日　８月１７日
特技　記憶
戦法　奇慚流護身術
容姿　黒髪　黒目
「ほらほら、紅ちゃんもそんな事言っちゃダメだよ？」

宮脇　微風
みやわき　そよかぜ
友人（父）　２４歳　科学者　〇〇っす口調　後輩
一人称　私
誕生日　１２月２３日
特技　計算と暗記
戦法　無し
容姿　青髪　群青色の目
「せんぱーい、何か面白い事ないっすか？退屈すぎて死にそうっす」

先締　木ノ芽
さきじめ　このめ
友人（父）　２４歳　中二病　Ｍ　後輩
一人称　私
　喫茶店『Ｍｏｏｎ　Ｄｒｏｐ』マスター
誕生日　１月１８日
特技　美味しいものを作る事
戦法　情報
容姿　金髪　金色の目
『混沌世界』
《カオスゲート》
「微風、そろそろツケを払わないと私の封印された右手の悪魔がお前を喰らうぞ？」

解錠　雛子
かいじょう　ひなこ
友人（父）　２２歳　ＯＬ（管理本部長）　クール　後輩
一人称　私
誕生日　８月７日
特技　罵詈雑言を考える事
戦部　言葉攻め
容姿　黒髪　黒目
「木ノ芽先輩、中二病発言も大概にしないと古鏡先輩に呆れられますよ」

望読　莢
もちよみ　さや
友人（父）　２２歳　国語教師　弱気　後輩

一人称　私
誕生日　３月１４日
特技　速読
戦法　無し
容姿　オレンジ色の長髪と目
「うう～、聞いてくださいよせんぱい～」

持読　爽
もちよみ　さや
友人（父）　２２歳　裏人格　後輩
一人称　偽物（われ）
誕生日　３月１４日
特技　荒事処理
戦法　喧嘩殺法
容姿　神は白で腰まで伸びてて目は紅色、莢がベースでぶっちゃけ
古鏡の髪と目が追加された感じ
『旦那、ちょっとばかし胸が凝ったから揉んでくれねえか？』

真桜　秋水
まさくら　しゅうすい
友人（妹）　１４歳　学生　子供　同級生
一人称　私
誕生日　９月２７日
特技　未来予知
戦法　見様見真似奇慚流砕身術
容姿　黄緑の目と髪
「蒼！ご飯を食べに行くぞ！」

パーティー…擬きの乱闘騒ぎ

やあ、画面の前の暇人諸君。
奇慚古鏡だ。
今回は、『Ｍｏｏｎ　Ｄｒｏｐ』であった、パーティー以上宴会以下のお祭騒ぎの事を話そうと思う。

ｓｉｄｅ古鏡

「それではこれより！
雛子ちゃんの昇進と、木ノ芽の漢検十級ギリギリ合格御目出度う会を始めるッス！！」
「「「「いえーい！」」」」
「ちょぉぉぉっっと待てぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」
「ん？なんっすか？木ノ芽？」
「今のは一体どう言う事だ！微風！
何故！何時！私が漢検十級をギリギリ合格したと言うんだ！」
「えー。したじゃ無いっすか、一昨日」
「してないわっ！
大体っ！私は既に、一級合格しとるわっ！！」
「ッ！なん・・・・だと・・・・」
「何故そんな、『知ってはいけない事を知ってしまった』みたいな反応をするんだっ！
大体お前は私と一緒に受験しただろうがっ！！
それにお前は、私の事をどれだけ馬鹿だと思っていたんだっ！」
「木ノ芽先輩、キャラが崩れてますよ。厨二病も跡形も無く消え去

ってますし。
それに、微風先輩も別に、本気で木ノ芽先輩の事を馬鹿だと思っては無いとおもいますよ？」
「そうっすよ、木ノ芽。
私は別に、木ノ芽が馬鹿だとは思ってないっすよ。
今のは言いすぎたっす。
今は後悔してるっす。
・・・・・・・・実際今は過去に戻って過去の自分を殴りたい気分っす」
「因みに私も今、過去の自分の行動に対して過去の自分を殴りたくなってきました」
「微風、・・・・・・・・お前・・・・
雛子は何でだ？」
「私が木ノ芽（先輩）の友だち（後輩）になった事を後悔する前に、殴ってでも止めたいぐらいっす（です）！」
「ちくしょぉぉぉぉぉ、お前らなんか、大っ嫌いだあぁぁぁぁぁぁぁ！
古鏡先輩！お詫びに私を縄で縛って鞭で百叩きの刑を二十セットで繰り返してくれ！」
「断る。お前らの問題に俺を巻き込むな」
「クッ。慰め（百叩き）ぐらいヤってくれてもいいじゃ無いか・・・・」
「慰めの部分に変なルビが振られてた様な気がするが、ここは会えてスルーさせてもらおう」
「・・・・・・・・今なら私のご奉仕がついて来るぞ？」
「要らん、帰れ。
それに折角の酒宴なんだ、そんな無粋な事はする訳がなかろう」
「・・・・・・・・ああ、そうだな。すまなかった。
今日は雛子の昇進祝いだ、無粋な事は辞めよう」
全く、面倒な奴らだ。

俺はよくこのメンバーで、大学卒業が出来たな。
まあ、あのアホ猫共より幾分かはマシか。
彼奴らは、常人なら付近に存在して居るだけで、ＳＡＮ値が削られた上でストレスで胃が消滅するだろう。
と言うか、あんな不自然な会話でよく会話が成り立つな。

「あの・・・・・先輩方」
「ん？なんっすか？雛子」
「今日は私の為にこんなパーティーを開いて下さってありがとうございます」
「・・・・・・・（；。０。）」
「な、何故皆さんそんな驚いていらっしゃるのですか？」
「いや、口蜜腹剣ならぬ、口毒腹剣のお前がそんな素直に感謝の言葉を言うなんて思ってなかったんだろう。
どうせまた、冷酷無比で慇懃無礼な罵詈雑言の連弾雨霰が永遠に繰り広げられるとでも思ってたんだろう」
「そこまで何時もの私は、冷酷無比で慇懃無礼な罵詈雑言の連弾雨霰を言ってますか・・・・・・・」
「まあ、否定できる部分は極分の一も無いな」
「そんな微妙な例え方をするくらいならもういっその事『おまえは使えねえクズなんだよバーカ。お前なんか消えちまえ』ぐらいに言ってくださいよ。その微妙な優しさが傷口を抉った上に塩を十ｋｇほど押し込んで来ます・・・・・・・」
「俺はそんな事を言うキャラじゃ無いし、別にお前が要ら無いなんてことはない」
「先輩・・・・・・・ありがとうございます」
「実際木ノ芽の抑え役を一人でするのは面倒だからな。
頑張ってくれ」
「どうせそんな事だろうと思ってましたよ！

ええ！どうせ私は木ノ芽先輩の抑え役ですよ！」

こっちは可笑しい事になってきているな。
これが、カオスと言うやつか。
そこまで恐ろしくも無いな。
アホ猫共の方がカオスだ。

「うわ、あの雛子さんまでキャラ崩壊したよ。
どうすればいいんだ？菫さん」
「私に聞か無いでくださいよ。
古鏡先輩以外はたぶんああいうのが好きなんですから、放っておくのが最善です。」
「まあ、そうだろうね。
僕もそれが最善だと思うよ」
「そうか？ならいいけど」
「最終的には無視して関わらないのが一番です」

こっちはこっちで、マイペースに食事をしているな。
と言うか、よくあんな騒ぎの中で静かに食事を出来るな。
称賛ものだぞ。悪い意味でな。

「そう言えば、菫」
「ふ？ふぁんふぇふふぁ？ふぉふぉうふぇんふぁい？」
「口に物を入れながら喋るな馬鹿者」
「んんっ！失礼しました。
それで、何ですか？古鏡先輩」

「爽は出さなくてもいいのか？」
「あ、忘れてました。
・・・・・・・・・・でも、此所の料理美味しいんですよね。
だから変わりたくないんですけ・・・・・・・・『いいから代わりやがれ！』ちょっ！勝手に出てこようとしないで下さいよ！
『いいじゃねえかよ！もう自分で代わるからな！
異論は認めねえ！』ちょっ！爽！まっ・・・・・・・・・・・・・・・
『ふーー。やっと出れたぜ。』」
「久方ぶりだな。爽」
『ああ、久方ぶりだな。旦那』
「何年ぶりに出て来た？
俺の記憶では四年ぶりくらいだったと思うが？」
『ああ、あってるぜ。
本物（さや）と偽物（われ）を旦那が別けた時から、四年くらい経ったぜ？』
「（何か大事な話の様だし、僕達は向こうで食べない？
微風さん達は向こうで暴れてるし）」
「（そうだな。流石にこれは私達が聴くべき事では無さそうだ）」
「ふむ・・・・・・・もうそんなに経つのか。序でに言っておくが、御前は決して偽物では無い。
前にも言ったが、別けたのは莢にとっては悪意（おまえ）は重過ぎて、御前にとっては善意（さや）が重過ぎて釣り合いが取れなくなって壊れそうだったから別けただけだ」
『相変わらず優しいな？旦那は。
でも、その優しさがいつか旦那の身を滅ぼす事になるかもしれないぜ？』
「阿呆め、俺は別に周りの有象無象に無差別にこんな世話を焼く訳では無い。
あくまで、俺が哀れに感じた、若しくは家族に属するものだけだ。
俺は最悪で最低だからな」
『カッハハハ！そりゃ確かに最悪で最低だ！

そりゃあ遠回しにだが、『家族以外は如何なろうと如何でもイイ』って言ってる様なもんだからな！
ハハハハハハッ！
まっ！それでこそ、旦那なんだろうけどな？
お？旦那なんだって、平仮名に変えると、『だんななんだ』ってなって回文っぽくなるな、意外な発見だ』
「話が逸れてるぞ」
『ああ、悪いな旦那。
ちょっと久し振りに外に出たもんで、テンションが可笑しくなってた。
それにしても、旦那の見た目は変わんねえな。羨ましいぜ。本当に歳とってんのか？』
「年月的にと精神的にはとっているが、肉体的にはとっていない。
二十のときに不思議物質を摂取したら何故か止まった」
『また不思議物質か。
結局のところ、不思議物質って何なんだ？』
「知らん。解ら無いし解ろうとも思って無い。特に興味も無いしな。
あるなら使うし無いなら使わん、それだけだ」
『そうかい。でもまあ、偽物（われ）には関係ない事だな。旦那にも解ら無いなら、偽物（われ）なんかには解る筈が無い』

たぶんこいつの一人称が偽物（われ）から変わる事は無いだろうな。
まあ、特に興味も無いが。

「そう言えば、爽」
『ん？何？旦那』
「（話し方が素に戻って来てるな）今はどの位溜まってる？」
『ああ、そうだな。四年分くらいだから、結構溜まってるよ？十人

や二十人じゃ足り無いよ？
まあ、性欲の方を満たしてくれるなら八回でいいぜ？
実際もっとヤって欲しいが、抜け駆けはしないって約束だからな、八回でいい』
「阿呆め、誰がやるかそんな事。戦争時代にぶち込んでやろうか？」
『くははは、相変わらずつれないね、旦那は。
戦争時代にぶち込んでくれるのは偽物（われ）としちゃあありがたいけど、本体（さや）の身体に傷が付いたら申し訳無いから辞めておくよ。
せいぜい、京都で通り魔とか、黄色いの＋某無双ゴキブリ触覚狩りとか、平行世界に行って『気まぐれ☆国潰しツアー』とかでいいよ』
「今から送ってやろうか？」
『ううん、それは今度にする。折角出れたんだから、久し振りのご飯を楽しむよ』
「ああ、そうか。というか御前は、何時まで外に出て居るつもりなんだ？時間によっては・・・・・「おーい！二人ともー！こっち来て一緒に騒ぐっすよー！」・・・・・・・・・ふう、ああ言ってるが如何する？」
『うん、いこうかな。旦那もいこう？
あと、時間によっては何？』
「後でな。それと、紅と蒼が二人だけで哀れだから、二人も誘っておこう」

で、微風達の居るところまで来たのだが・・・・・・・
これは一体如何言う状況だ？

「フハハハハ！いくぞ微風！雛子！
『ああ、嘆きたまえ紅玉の空よ、無為に帰するは聖域に住まうもの

なり。眠りて寄せるは破異の狂気、此処は狂神信仰の世界。おお、今此処に目覚めよ、闇統べる者！混沌の支配者よ！踊り狂え！【狂死刃（ナソウル）　混沌世界（カオスワールド）】！！』」

「はっ！甘いっすよ木ノ芽！

『逝け！進め！進軍せよ！淘汰しろ！蹂躙せよ！貴様等は我が私兵、全てを蹂躙し破壊する死兵。歩め！【死軍（バッドデッド）　狂化生命（カーニバル）】！！』」

「油断大敵、無為無策の極みですよ！お二人とも！

『泣き叫べ死の王、狂い狂い狂え灰の王女。宵に眠りて逢魔に伏す、黄昏に崩れて黎明に坐す。ひれ伏せ！【　勅命（アブソリュートサウンズ）　大音崩御　】！！』」

「「「うおおおおおお！！！」」」

爆音と共に店では無く、空間が壊れていく。そんな攻撃を互いに放ち合っている。

・・・・・・・俺達が話してる合間に一体何があったんだ？

三人とも女性にあるまじき叫び声をあげているぞ？

特に、微風と雛子。お前たちに何があった。

何故全員必殺技の様なものを発動しているんだ。

店が壊れる・・・・・・・いや、消滅するぞ。

「・・・・・・・姉さん、何あの地獄絵図。

全員厨二病を発症してるんだけど。

僕達は何をすべき？アレを止めるべき？如何考えても無理そうなんだけど、止めなきゃいけないよね？アレ」

「辞めろ。もう私達では止めるのは無理だ」

「だね。辞めとこう。

そう言えばだけどさ、何か今話さ、僕達の扱いがあまりにも酷すぎると思わない？」

「確かに」
「まあ、ネタが無いから仕方ないんだけれどね」
「使えねえな作者」
「ね、もうちょっと頑張ればいいのに」
「まあ、それも酷だろう。
一応受験生なんだし。」
「「「はーっはっはっは！くらいやがれぇ！」」」
「「うるっせえ！！西技『ノワール』！！」」

あの二人はあの二人で、会話が最後の方現実逃避になっている様な気がするし。
最終的にはキレたし。しかもマジで。
すぐに収まったみたいだが。

『旦那、あの三人なにやってるの？』
「如何みても喧嘩だろう」
『へえ、喧嘩か。
・・・・・・・・・・ なら偽物（われ）も参加しなきゃいけねえな！』
「・・・・・・・・・・・・ 行って来い」
『おう！行ってくるぜ！
オラオラオラオラァ！偽物（われ）も混ぜやがれぇ！』
「ちょっ！？御前、爽の方か！？」
「爽だと！？」
「マズイ！皆さん！此処は一旦協力しましょう！」
「「ああ！って、全員退避ィィィッ！！」」
『ヒャァッホォォォォウ！！
オラオラオラオラァッ！歯ァ食いしばれやァ！
即興奥義！【愚業投世（ノーグッドデイ）】！！』

こっちはこっちで、爽が混ざった事によって更に混沌と化した。
ああ、店がさらに壊れて行く。
不思議物質の準備はしておくか。
さすがに壊れたままじゃ木ノ芽が哀れだからな。
ああ、テーブルが砕け散ってこなになって消えた。
・・・・・・・最近になって、不思議物質の使用回数が増えて来たな。
全く、疲れる奴らだ。

しかし、それをぬいても。
相変わらず彼奴等は面白いな。
昔は全員、もっと暗くて険悪な雰囲気が漂っていたのだが、今ではこんなバカ騒ぎをするくらいには仲が好くなっているとは、過去の彼奴等は思いもしなかっただろうな。
莢が『雪路』で、微風が『早月』で、木ノ芽が『四ッ谷』で、雛子が『箍束』だった頃には、友人・・・・・というよりは親友か？
まあ、そんな感じの関係ができるなんてな。
特に莢は明日には自分は死ぬんだと常に思ってた頃だからな、『雪路』時代は。

まあ、今は今だ。過去は如何でもいい。
過去に現在はないし。
今、この瞬間こそが俺達のいるべき世界なのだから。
彼奴等のこんな生活や日常を守るためなら、全てを投げ出してでも、と言うのはあり得ないが、その他を切り捨てる事は躊躇しない。
寧ろ進んで切り捨てる。
まあでも、そんな事にはならないだろうし、ならせるつもりも無い。

今はもう手に入らない、だから過去ではなく未来でもなく、現在に生きればいい。
まあ、どんな事になっても関係は無いさ。
俺のテリトリーに入って勝手な事をしたならば、跡形も無く消すだけだからな。

そろそろ疲れた。
だから今回は此処でお別れだ。
あの馬鹿共に戦争を止めさせなければいけないし、紅と蒼を元に戻さなければいけないからな。
それではさようなら、また会おう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7194x/

魔法？……面白そうだ

2011年10月28日13時12分発行